

特集・横浜論 ②

座談会 横浜の市民

大庭恭子・金指真理子・児玉正臣・樋口 勇・中西昭雄

一 横浜でしている仕事・活動

中西 今日「横浜の市民」というタイトルで、仕事や生活の体験の中から横浜市民のライフスタイルや生活について、立場立場で感じになったこと、あるいは今後横浜が市民生活レベルでどうなっていくか、というところのお話をしてみたいと思っております。

私は二十何年間、港北区の妙蓮寺に住んでおりますが、たまたまYES（横浜博覧会）の前段階調査で「横浜市民の意識特性」という調査をお手伝いしたことがあります。そのときに短いレポートをまとめたのがきっかけで、東京にかなり押されぎみの都市横浜の中で、オー

バーに言えば文化的な活動の場をつくらうということで、「共同デスクYOKOHAMA」が一年前に結成されました。会員は百二十人ぐらいいますが、いろんな年齢、ジャンルの方がお集まりになって動き始めたところです。

生活レベルでは、私は基本的に仕事はずっと東京で、横浜は寝るところみたいな感じですが、そのことも後ほど皆さんのご体験の中から出てくる話の一つではないかと思えます。

生活感覚から生活クラブへ

大庭 私は結婚してから横浜に越してきました。生まれは中国の大連で、終戦後引き揚げてきて転々としたましたが、横浜へ来て二十二年ぐ

座談会出席者

大庭恭子（生活クラブ生活協同組合理事）
金指真理子（株）金明堂情報開発部
児玉正臣（横浜T・B・T協会）
樋口 勇（東京急行電鉄（株）田園都市事業部多摩田園都市部計画課参事）
司会・中西昭雄（寒灯舎編集人）

らいになります。現在の住所へ越してきたのは、今から十四年ぐらい前のことです。二俣川の自動車試験場の裏に山を切り開いて東急ニュータウンが開発されている最中でした。あの当時地価がどんどん上がっているという感じで、買お

うかと思つて見に行つたのですが、横浜というイメージでないような山の中なので、やめたのです。その後また思い直してもう一回行つたら、それこそ一カ月もしないうちに五百万円ぐらい上がつていたという、すさまじいときだったような気がします。

結局そこを買つて住みついてすぐに、生活クラブ生活協同組合（以後、生活クラブ）が仲間を探しにやつてきたのに出会つたのです。そのとき生活がすごく不便でした。私にはそのころ二歳と五歳の子供がいて、自転車の前と後ろに子供を乗せて、スーパーまで買い物に出るといふ生活をしていました。一面のんびりしてよかつたことはよかつたのですが、非常に不便を感じていたところに生活クラブが来まして、と



もかく重たいおしよゆとかソースとかを届けられるならいいという感じで、何の疑問も感ぜずに簡単に入つて、それから今までずっと生活クラブで活動してきたわけです。

二十二年の中で、私の横浜観といわれましても、別に生粋の土地っ子ではないし、生まれは大陸だし、土地に愛着とかはないのです。まして移り住んだところが新興住宅地ですから、地域の連帯感などありませんでした。でも、子供はそこで生まれ育つて二十歳になりました。子供を見ていると、幼稚園から高校ぐらゐまで育っているから友人も多く、子供にとってはそこがふるさとで、大事なところだという感じなんです。私たち大人にとっては、主人はここ数年体育指導委員などを引き受けてから結構忙しいのですし、私は生活クラブの活動の中で地域とのかかわりを持っています。町内会とか行政という縦の関係でなく、横の地域の組織としておもしろい活動だと思つて、ずっと続けてきております。

それで今までできていますので、自分がやってきた活動の中で、横浜とのかかわりはいつも対行政というか、市が私たちのやつていることをわかつてくれないとか、あるいはこういうふうにやつたらいいのではないかと、この十何年いろいろ言つてきたなという感じですが、マンモ

ス都市ゆえに苦しいという感じを持つているけれども、ヨコハマという響きは好きだし、多分死ぬまで横浜に住むと思うので、名前だけでなく、ほんとにいいなといえるまことにしたいなというのが感じとしてあります。

父の代から横浜で商売

中西 それでは次に金指さんをお願いします。

金指 私は横浜生まれの横浜育ちで、野毛で生まれました。十二歳ぐらゐまで野毛の上に住んで、店も野毛にありました。父が始めた会社ですが、その後横浜駅に出て、さらに二俣川の駅ビルや鶴見の駅ビルでも眼鏡店を営んでおります。横浜駅の店は地域密着ではないのですが、二俣川、鶴見、茅ヶ崎の店は地域密着型で、すごく差があつておもしろいものです。元町は地域密着のようでありながら、そうでないところで、しかも皆さんのイメージで思われる「横浜」の部分で毎日仕事をしているわけです。横浜に住んでいる方が思っている横浜のイメージは、中区の関内から山下町・元町にかけてのかわいのですが、そのイメージの真中にいると、買い物客は横浜の人ではないということ、すごくおもしろいのです。

私ごとですが、去年結婚しました。相手はアメリカ人で、半分日本の血が入っているので

が、国際結婚になります。そういう経験を通してみると、横浜は外国と近いまちだと思えます。ほかのどのまちより外国人が身近に感じられ、異人さんが周りにいるのは、東京より横浜の方がイメージに近いと思います。

退職後にT・B・T協会へ

中西 児玉さんはどうでしょうか。

児玉 私も浜っ子ではないのですが、横浜市民になったのは十五年前です。今考えてみますと、その当時は五十歳ぐらいで、脂の乗っている働き盛りだったと思います。偶然のことで横浜の三ツ沢に住まいを見つけてまして越してきたのです。今思い出してみますと、それよりずっと前に、横浜に知人がいまして、その方が神奈川區沢渡にいたものですから、その家に遊びに行くときに横浜駅西口でおられたのです。昔の西口は材木が置いてあって、運河があり、出口もさびれたところでした。その後、私が十五年前に三ツ沢に越したときには、三ツ沢グラウンドも立派にできていましたし、整備されていましたが、横浜から東京へ通う、ただ駅から電車に乗るだけの毎日が続いていました。

それから五年たち、今から十年前、現役を引くときに、私どもの会社が台湾に子会社をつくる関係で、そちらへ行ってくれないかというこ

とで、はじめは私だけ単身で、終わりごろには女房も連れて、台北に住んだわけです。これが私にとっては何ものすごい環境の変化で、今、NIESといわれるところで、先進国に追いつこうとする活気は感じましたが、タイムトンネルの中みたいな感じを受けました。そういう目でたまに横浜に帰ってきますと、横浜というところはすごいところだなと思ったのです。

五年前に現役をやめて仕事がなくなり、これからどうしようかなと思っているときに、たまに朝日新聞に、「高齢化社会の今後」という題で、横浜T・B・T協会理事長の加藤さんの記事が出ており、「福祉一辺倒でなく、高齢者が残された有意義な時期を過ごせるように、お互いに励まし合うことを考えようではないか」という記事を読みまして、これはなかなかおもしろいなと思って、T・B・T協会に加盟したわけです。T・B・T協会は、できて十二年目で、会員にはいろいろなキャリアの方がいらっしゃるって、集まると非常におもしろいところですよ。

そんなことで、暇を見つけて横浜の主なるところを見ては、近代文明の窓口という役割を果たしてきた横浜の歴史は大したものだと思うのですが、今後これを持続して、活気のある横浜にするにはどうするのか、私も一緒に考えたいと

思っている。T・B・T協会の中でも地味な努力をしているところですよ。

田園都市開発に二十年

中西 では樋口さん、お願いします。

樋口 私は上大岡に住んでおりますが、仕事は、東京急行電鉄に入社以来、多摩田園都市の開発関係に従事しています。

多摩田園都市とは、田園都市線梶ガ谷駅から中央林間駅までの沿線地域を呼んでおります。面積的には横浜市緑区が一番多く占めております。沿線人口は四十三万人住んでおりまして、川崎市、横浜市、大和市、町田市の四つの行政にまたがっている範囲です。その中で計画開発面積五千ヘクタールということをやっております。あの辺は、横浜といっても多摩丘陵の一角というか、横浜市でも北端の方で、そういうところで新しい街づくりをしております。土地の方も中にはおられますが、ほとんどが新しく移り住んできた方で、そういう中でもお祭りとかイベントを通じて地域のコミュニティーをつくりたいということで、皆さん努力されているようです。そういうところで仕事をしておりまして、今日はそんな目で見えた横浜について発言させてもらいます。

二——仕事・活動を通して見た横浜市民の特質

中西 一通り自己紹介していただきましたので、次に、皆さんはそれなりに仕事とか活動で横浜のいろいろな部分にかかわっておられるわけですが、今なさっている仕事や活動の内容、そこから見た横浜市民の特質などについて、日常お感じになっていることをお話しただけだと思います。

①——結婚相談のワーカーズ・コレクティブを通してみる

中西 大庭さんは、生活クラブから出たワーカーズ・コレクティブで活動されています。このワーカーズ・コレクティブは、女性が集まって自分たちの仕事をつくって——外から見ると極めて時間賃金が安いのに——皆さん満足しているという不思議な活動だと思っております。今なさっている活動と、そこでごらんになった横浜の市民とか女性についていかがですか。
大庭 私が生活クラブの中でずっと活動を続けてきている原点というのは、石鹸を使う運動から始まっております。石鹸を使う運動によって視野を広め、社会を見る目が養われて、自分の生活のあり方が変わりました。そして大勢の人

に話をしてくる中で、今の自分がつくられてきたなと感じています。生活クラブの活動は自発性に基づく活動ですから、四六時中家をあけている私のような理事でもすべて無償です。

生活クラブの中でワーカーズ・コレクティブが出てきた発端は、生活クラブの共同購入を賅ではなくて、デポジットといってお店形式のものを持つ中で、生まれてきました。デポジットの場合は生活クラブと契約して仕事を請け負います。自分たちで仕入れて、売って、マネージメントするところまでやろうという考えから出てきているんです。でも、私のやっているワーカーズ・コレクティブ「グループまどか」というのは生活クラブの活動と関係ないところで出てきていて、仕事は結婚相談の事業です。

地域の機能としての結婚相談

大庭 私は石鹸をつくる運動とかごみの問題とかに興味があつたんですが、生協で結婚相談の仕事もボランティアでやってくれないかという要望が組合員からあつたんです。普通の生協は若いお母さんが中心ですから結婚相談は需要のない仕事だけれども、やりたいと思っている人たちに、「やるなら生活クラブでボランティア的にやるのではなくて、ワーカーズとしてやったらどうなの」とアドバイスしているう

ちに自分自身もやることになり、代表として現在やっています。

五人で事業をしまして、私ともう一人が四十六歳ですが、五十代が二人、六十代が一人です。お金が欲しくて始めたわけではありません。お金があるのと無責任になつてしまふ面もあるのですね。例えば公共の結婚相談所もありますが、そういうところで話がまとまることはまれのようです。

何でワーカーズで結婚相談室をすることに踏み切ったかというところ、市場で商売になつている結婚相談は、普通だとコンピュータなんかを使って、入会するのに二十万円とか三十万円もかかつたうえに、高卒だったら入れないとか、身長何センチ以上とか、人間性を無視したものが商売としてまかり通つていることに対して物申したいというか、そんなものではないということから始めたのです。昔なら隣のおばさんが「あそこのお兄ちゃんいいわね」という感じで、まちの中で隣の人を紹介していたことが今はほとんどないので、地域の中でそういう役割をしたかどうかということから始めたのです。だから、「まどか」の場合、入会金一万円、月々の会費は千円ですから、どこかの場所をまともに借りたとしてもやっていけない商売です。

生活クラブが新しい働き方を広げたいと援助

してくれているからできているので、まだ半人前です。ボランティアと普通の職業との中間的な働き方で、多少でも人のためになる活動をして、それに対して報酬がある程度得られるという、納得した働き方をしたいということでやっております。「まどか」はまる三年たちますが、皆さんかなり満足してやっています。集まってお世話をして、自分たちもコミュニケーションを持って、音楽を聞いたり旅行をしたりと、楽しみながらやっている働き方です。

これは軌道に乗っていますが、別にもう一つ、パンの工場をワークス・コレクティブでつくるため、生活クラブのセンターに工場をつくるため、自分たちで納得いくパンをつくらうということで、人を募集しているところです。「お金が欲しい人はここへ来ても目的は達しませんよ」といって集めていまして、この間説明会をしましたら二十五人ぐらい来たのですが、そういうものに今の三十代、四十代の人は非常に興味を示してきます。

女性の方がしっかりしてる

中西 結婚相談ということですが、山形の農村でお嫁さんのなり手が無いのはわからないでもないのですが、都市でもそういう機会が少ないですか。

大庭 少ないと思いますね。私のところは会員は百人前後で、入って、ここには良い相手がいそうもないと思っただらやめてしまう人もいますし、二年も三年もいる方もいます。入ってこれて、この方とこの方は合いそうだと思うと紹介してあげて、「学歴だけじゃないのよ、人柄なのよ」といってあげる。そういう手づくりをモットーにした相談室です。男性より、女性の方がしっかりしているようで、男性の軟弱化はどこも同じようです。男性はともかく結婚したいといってくるのですが、「いい人いないかしら」といって入っているのは女性で、よほどよくなければ女性は「うん」と言わないところがあるのです。三年やって十二組ぐらいまとまっているのですが、まとまっている人は学歴だの何だのはいわない。なまじ「東大出ています」とか、「早稲田出ています」とか、「有名などこどこへ勤めてます」という人の方がまとまりません。ほどほどに自分をわかまえていてというか、相手の痛さもわかる人はまとまるようですよ。

中西 主に田園都市線沿線の方が多いのですか。

大庭 横浜全域から来ます。東京とか千葉からも来るのです。私は旭区でやっていますから旭区の人も大勢来ますが、時々生活クラブのネット

トワークで宣伝しますと結構遠くから来ます。

②—オリジナルのジュエリーの店を通してみる
中西 金指さんは、お父さんの代から商売をなさっていて、それを引き継がれて、宝石店を通して自分流の働きかけをなさったと思うのですが、そういう点からお話しただけませんか。

差異化・個性化を目指す

金指 私がこの仕事を始めるようになったのは、大学四年ぐらいのときからなのです。そのきっかけになったのは、四年ほど前の話ですが、元町の店を半分壊して何か別の商売しようとしたときに、普通のものでは受け入れていただけなかった。どこにもあるものはだめなので



す。ちょっと試験的にやったものがあつたのですが、それはだめで、何かほかのものをやらなくちゃいけないと、いろいろ考えていたのです。

ちょうどそのころからいわれてきたことに、差異化とか個性化がありますね。ほかにない私だけのものとか、ある個人のプライオリティー、ステータスシンボルになるもの。けれどもすく高くてはいけないものという定義の中でいろいろな商品を開発していつて、私がつているものはオリジナルのジュエリーです。彫金が多いのですが、商品でなくて作品というイメージで、それでいて完成度が高く、小遣いで買えるぐらいの値段のものをやったのです。

最初のころは、新しいもの好きは若い人ですから、若い方の購買層が多かったのですが、今は大庭さんぐらいのお年のお母様たちが「お昼、元町で一緒に食べましょうか」とお出かけになって、五、六人で来ていただいた時に「あら、これ変わっているわ、これ、いいじゃない」という感じで、楽しくお買い物していただいているという状態です。変わり過ぎていてもいけないのですが、他人とちょっと違いたいというのは、年々、若い人だけでなく、おじいさん、おばあさんと呼ばれている層まで、そういう意識がものすごく高いと思うのです。私の母とか父も、何でも同じというのではなく、自分だけ

ちょっと違うものをとという好みはあるみたいですね。

これを横浜全体として定義するのは難しいと思いますが、流れとして、全体的に物資販売においてはそういう志向が強いようです。消費財は別ですが、装身具とか身につけるもの、洋服もそうですし、生活の上で人と差をつけられる部分では、そういう傾向が強い気がします。

横浜は流行には保守的

中西 私は女性の流行に疎いんですが、ちょっと前にハマトラが全国を風靡しましたね。横浜は近ごろ流行とか風俗の発信性はかなり持っているところですか。

金指 逆で、すごく保守的です。どの若いお嬢さんでも同じではないかと思うのですが、あるところでは違うのですが、ある面ではみんなと同じ、髪型もそうですし、バックとかも、あそこで買ったという安心感、ある程度共通の中にいたいのではないかと思えます。

原宿で奇抜な格好しているのは東京に住んでいる人ではなく、いろいろなところから来て、日曜日だけパフォーマンスして帰る人だという話も聞いたことがあります。外国人が来ると、東京にいる人はみんなああいう格好している、原宿に行くときとすごいわれちゃうのです

が、それは極端なことで、横浜に住んでいてパフォーマンスしている人は少なく、皆さん普通に気楽にしているのです。

横浜生まれのファッションといわれているハマトラはほんとに保守的なのです。フラットのシューズにソックスを履いて、トレーナーですから、華美な服装でなくて、掃除、洗濯のできる格好なのです。私も横浜の学校にずっと行っていましたから、高校のときにとでもは行ったのですが、そのときみんな同じような格好していました。私の友達も、結婚して子供が生まれるぐらいの年齢ですが、不思議なことに、生まれるとハマトラに戻るのです。独身のときは男の人にきれいに見られたいから高い靴を履くのですが、子供ができたりすると元町のハマトラに戻って、子供とおそろいのを着るのです。自分にかけるなくて子供にはすごくかけるのです。

③ サラリーマン退職者としてみる

中西 兎玉さんは、東京で仕事をなさって、最後は台北というお話がありました。共通して横浜にいるサラリーマン男性のかなりは、東京へ通勤して、横浜は寝るところというの一般的なパターンではないかと思えます。特に高度成長下のサラリーマンは会社で、気がついて地元に戻ってくると周りに何にもないという孤

独感にさいなまれるとよくいわれていますが、そういう点はいかがでしょうか。

現役時代は仕事に無我夢中

児玉 おっしゃるとおりですね。

私の子供は、十五年前に三ツ沢に越したとき東京の高校を卒業する時期でしたから、横浜で子供たちが生活したという実態を見ていないわけです。横浜に自分自身も足が地についていない気がするのですが、十五年間自分がそこで住んでいていろいろなことを見る、特にだんだん年とってきて、雑音がなくなって視野が広がることは確かにあるのです。

横浜は三百万人を超える大都市になったのですが、昭和三十年は百十万人、それが三十年間で二百万人も増えるから方々が開発されるのは当然で、おかげで我々もその恩恵に浴してきたのですが、東京に向いている横浜市民ということとは私自身も感じていたのです。高度成長時代は会社社社でもって夢中で、自分が年とつたら将来どうなるかは考えている暇もないような時期を過ごしてきました。今そういう時期になって感じるのには、現役時代は、飛行機でいったら夢中で飛んでいる状態、前進あるのみで、横浜からラッシュアワーの電車に乗って東京に行く、また帰ってくるという繰り返しなのです。



ながら、これから横浜市民として生きるのに、生活クラブの話聞いて非常に参考になったのです。ああいう新しく開発されたところで、生活協同組合が結婚という難しい問題の相談までやるという地域に密着した動きを聞いて、なるほどなと思うのです。私どものような年になるとそういう時期も通り越えて、どうやって健康を維持して余生を楽しめるか、そのためにいいところは横浜ではどういうところなのか、といったあたりが課題になります。

退職したら集まる場がない

職場の人たちと人間関係を持つけれども、会社が終わって赤ちょうちんで一杯飲もうと出かけて、そこで上役の悪口を言ったりしてサラリーマンのコミュニケーションをとるわけです。それは東京の神田とか、そういう駅の近くでやって、みんな散り散りばらばらになるから、私は横浜で一杯飲んだことがなくて繁華街を知らないのです。友達が横浜に来たときに「案内しろ」といわれたら、顔なじみの店がなくて困るのです。それが尾を引いて、今でも昔話のできるところがないし、これから何を頼りにしたらいいのか。特に高齢化していく中で、これからそういう人たちがだんだん増えてくるのではないかと思うのです。そういう人たちの心情をある程度自分で感じ

退職したら集まる場がない
 児玉 暇になったら晴耕雨読がいい、地方で悠々自適の生活ができたらいいなとみんないます。私の知っている人が、甲府に大きなブドウ畑を持っています。現役時代は学校の先生をやっている、ブドウ畑があるものだから、昼間は畑をいじって夜学校に勤めていたのですが、その人が定年になった。定年になってからしばらくの間、高等学校の寮の管理人を何年間かやって、それも引退しました。「今はどういうことをしているのですか」と聞いたから、そういう人たちは昔から居るところがあるから、「町会とかクラブの幹事役をやって、毎日が忙しい」といっているわけです。たまには人が集まって、老人にしる若い人にしる、酒でも飲

みながら話し合うところに人間の結びつきがあるのですが、横浜ではそういうことができないのです。

経験を生かす場としてのT・B・T協会

児玉 私がさっきいった新聞記事に目がいくのは、地域に密着して、今までの高度成長時代の企業とか何とかとの結びつきとは別に、何かないかと思っているからなのです。私の友達で、たまたまコンピュータをいじっている人から、今はパソコンがはやってきて、少しお金を出せば買える時代になってきたということ聞いたから、これはおもしろいなと思ったのです。あれはゲームをやるぐらいではおもしろくない。自分でプログラムを組んで、そのとおり相手が動いたときに快感を覚えるのです。指先や頭を使ってやるので、そういう方面に興味のある方だから高齢向きの仕事だなと思って、私は友達とやっているのですが、それだけでは満足できないから、T・B・T協会のミーティングに時々出ていろいろな話を聞いたりしているのです。

T・B・Tというのは、「TODAY BRIDGE TOMORROW」の頭文字の略字で、「あすへのかけ橋」という意味です。自分たちのキャリアをこれからの新しい世代にどう引き継いでいっ

たらいいか、そういうことに注目しながらいろいろなことをやってみようという会です。婦人部の人たちは非常に熱心で、時々集まって、草細工とか編み物とかいろいろやっておられて、方々のバザーに出して、楽しみながら社会とのつながりを持つようとしています。

男性で絵をかかれる方は、その才能を生かしています。実際に横須賀市でやっている例ですが、ごみを出しますね。そこに立て看板があって、「月・水・金に出してください、それ以外の日は出さないください」と書いてあって、あとは掲示板になっていて、非常に殺風景なのです。横須賀市では、「まちをきれいにしましょう」という標語を入れて、それをデザインした看板にしています。これにT・B・T協会が協力しているのです。まちをきれいにすること、自然を大切に、緑とかきれいな水を残すことについては特に注目しているというものが私どもの活動です。神奈川県とか横浜市などと接触しながら、入れ物はお願ひするけれども、それを生かしていくのは我々だという考え方もとに地味な仕事をしているところです。

中西 T・B・T協会の仕事はボランティアですか。

児玉 ボランティアです。

中西 ペイはなしですか。

児玉 ありません。毎月一回「横浜T・B・T協会会報」を出しているのですが、その費用はみんなが出し合った会費で賄ひ、事務局の方の交通費だけは出しているようですが、ボランティアです。

④ 都市開発プランナーとしてみる

中西 横浜を見ていて、この二十年の間で、何が一番大きい変化かという、港に対して丘の部分の膨張、拡大があると思います。極端にいうと、港と丘という相反する性格のものが二つあって、今日の横浜というある意味でとらえどころのない大都市ができたと思うのです。都市プランナーのお立場から、樋口さんはどうお考えですか。

樋口 多摩田園都市というところは新しく開発したところですので、当初は通勤・通学圏は完全な東京依存型でした。現在でもそういう傾向はありますが、開発してから二十年以上たちまして、そこで生まれてそこで育ってきた人も出てきていますし、まちも熟成してきておりますので、だんだん生活圏としてのまちになりつつある状況だと思います。

主婦の就労意欲は高い

樋口 昭和六十年に多摩田園都市の住民二千人



の方に対してアンケート調査をしました。その中で「まちに対しての満足度はどうですか」という質問に対して、「非常に満足である」、「まあまあ満足である」を含めて、「満足している」方が八〇%、大半の方はこのまちを気に入って住んでおられるようです。

生活の余裕感、これはどこでも同じだと思うのですが、若い人と五十歳以上の方に生活の余裕感を感じている方が多いようです。

自由時間の過ごし方、何をしているかを尋ねますと、圧倒的に多いのが「テレビ・ラジオによる憩い」。やりたいものとしては体を動かすもの、「旅行」とか「テニス、ゴルフ」をしたという希望はあるのですが、現状はテレビ・ラジオのごろ寝。

今は何でそれができないのかということに対しては、「自由時間が足りない」という答えが多いようです。

家庭の主婦の働く意欲を見ますと、「これから仕事をしたい」とおっしゃる女性が多いので、女性の社会進出は社会的にもよくいわれていますが、田園都市というまちでも同様の傾向が予想されます。

老後についてどう考えているかについて回答が多かったのは、「現在の場所で悠々自適に過ごしたい」というものでした。

ライフスタイルになるかどうかわかりませんが、こんな結果が出ております。

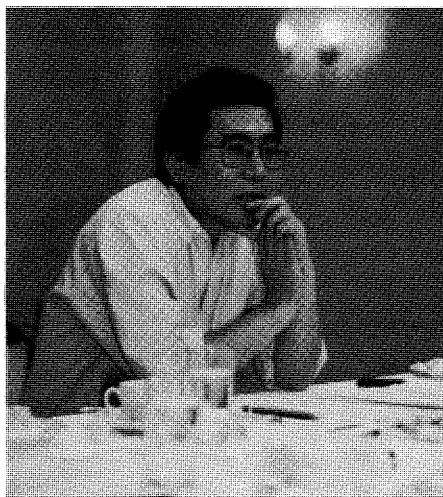
三——横浜の課題

女性とお年寄りの自立的活動が都市を熟成させる

中西 今出された都市横浜の問題点は、実に多岐にわたっています。私は、始めに話しましたレポート「横浜市民の意識特性」にもそういう視点で書いたのですが、横浜を都市としてこれから熟成させていくものは何かというと、女性とお年寄りがつくっていく自立的な活動ではないかと思うのです。現実に大庭さんの周辺とか、児玉さんのT・B・T協会など、そういう形で

徐々に始まっていると思います。さらにもう少し大きくいえば、大都市の魅力は何かというと、世代を超えていろいろな人にビジネスチャンスがある——単なる金もうけではなくて、自己表現の場が形成し得る可能性が強い——ところにあると思うのです。そういう点で、皆さんはいろいろ働きかけをなさってきて、横浜の魅力をどうお感じになつていらっしゃるでしょうか。

大庭さん、横浜は生活クラブを中心に、女性が動くスタイルができてきていると思うのですが、どうですか。



大庭 できていますね。まじめに話をしていると、みんなあるレベルの学力があつて、余裕があつて、そんなに差がないのです。その辺を理解すると、働くこととかボランティアとか市民

運動とか、いろんなことを含めて動くんですが、そういうアクションをするところが余りない。そこで、やたらと生活クラブが目立ってしまう。という感じはあるんですが、意欲はみんなある。ただ知らないというか、知らされていないと思うのです。テレビから聞くものだけが情報だと思っているから、私たちが発信する情報に「えっ？ そうなの」という驚きがあり、かなり素直に受け入れていくところはあると思います。

これからは女性とお年寄りが社会を作っていく、ほんとにそうだと思います。私は今、四十六歳ですが、八十歳まで生きるなら七十歳まで元気でいなくては退屈してしまうがなと思っています。そういう四十代はいっぱいいるわけです。自分が六十歳のときどういうところまで何をしていようか、そのために今から何かやりたいということがあるのです。各区で区民会議がありますね、そのときに高齢化の問題を話し合う機会がありました。現在高齢化している人がどう暮らすかということだけがテーマになり、四十代が発信する十年後、二十年後の話はなかなか受けとめてもらえないのです。

そういう意味では、私たちの世代が高齢化に向けて、仕事であったりボランティアであったり、いろいろなことを含めてできるものがいっ

ぱいあるのですが、それを誰かコーディネートする人はいないのかしらと思っているのです。ハードな面は「よこはま21プラン」を見てもらえばありますし、その中でソフトな仕事は女性とか老人にもできます。生活クラブの周りでは、しゃにむにもぎ取ってきたところからやろうとあって、女性はそれをおもしろがってやっています。

情報をどう取り入れるか——ソフト面の整備を

中西 児玉さん、T・B・T協会をご存じになったのは新聞記事ということですが、都市で男が情報を得て動こうとする情報量が極めて少ないと思うのですが、いかがでしょうか。女性の場合ですと口コミのコミュニケーションが形成されているけれども、男の場合はそういう情報網に入っていないと思うのです。

児玉 全くそのとおりです。今考えてみると井の中の蛙で、自分の仕事の分野はものすごく精通していて、何か問題があれば夢中で解決するわけで、それが今日の日本のいろいろなことを支えてきたと思うのですが、そこから出た場合に非常にむなしさを感じるのです。

そこで、情報から遅れないためにも、元気に生きていくためにも、自分で努力しないと取り残されてしまう。

例えば、健康はもちろん大事ですが、健康であるためにはいろいろなことに興味を持って調べることが大事で、私も暇になったので、ちょっとしたことでも、おやつと思ったら百科事典を引いてみたり、辞書を引いてもう一遍確認してみたり、そんなことをしながら一つ一つ納得していくのです。

先ほどいったコンピューターは我々の最初の時代にはなかったのです。私が現役でやっているところは、手の届かないところで専門家がいているものであって、プログラムには近寄れないと思っていたのです。しかし、私が台湾に行ったら、私が一番びっくりしたのはワープロで、ワープロって何だろうと思ったのです。会社でつくった文書がきれいにタイプで打ってあるから、「これ、どうしたの」と聞いたら、「今こういう時代になったのですよ」と言われました。ワープロってどんなものかなと思っていたら、うちにどんどん安くなって、それなら自分でやってみようと思っただけです。

せがれに「ワープロを手に入れたいからいいものを教えてくれ」といったら教えてくれて、定価より安く買ったと思ったのですが、それから何ヵ月かしたらそのまた半値になってしまった。どんどん進歩していくのはいいけれど

も、これだけハードが進んで、「みなとみらい21」の中にはインテリジェントビルができ、最先端をいく情報の固まりみたいなのができるだろうと期待しているのですが、そんな中で老人が置いていかれないようにするためには、我々もそういうものを学んでいく必要があると思うのです。

この間NHKで、老人が自動販売機に百円玉を入れるとき、縦に入れるのがいいか横に入れるのがいいか、そんなことをやっているのを見ていました。なるほどなと思って自動販売機を見てみると、横に入れるのもあれば縦に入れるのもあるのです。右手で持ったときにはちよつと斜めにした方がいいとか、左手ならこうだとか、専門家が研究しているようです。そういう時代になってくると、我々ぐらいいならまだいいけれども、七十歳、八十歳ぐらいになってくると切符を買うのも大変だろうと思う。銀行へ行ってカードで引き出すのもどうやっていいかわからないことがあると思うのです。そういうソフト面の不親切がまだあるのじゃないかという気がしています。

中西 共通して出たのはソフト面のことで、その面はまだまだこれからの問題だと、確かに私もそう思います。

ビジネスチャンスも交通網の整備から

中西 都市のビジネスチャンスについてですが、横浜は都市ができたときから外国への窓口である港ができて、まさにビジネスチャンスでできてきた町だと思うのです。この間、中心部の陥没現象というか、覇気がないという問題がよくいわれますね。

金指 新しいものが生まれることが最近は少なくなりましたね。

東京の銀座だと、三十年やっても子供みたいな感じがしますが、横浜自身が若く、やっと来百年になるくらいで、歴史がそんなにないわけですから何でも受け入れる。だから人口も何百万人も増えたと思うのです。ビジネスで何かということになると、東京が近過ぎるから、東京でやった方が影響を及ぼしやすいこともあって、横浜でビジネスということは少ないと思うのです。

ただ変わりつつあると思うのは、東京は地価が高く、出店するにも、とんでもない金額がないと出せないわけです。横浜の方が東京に比べて安いとか、元町は別にしても、ほかの部分で考えればまだまだいろいろなチャンスはあると思います。

ただ、樋口さんのやっていらつしやる緑区と中区はすごく遠いのです。中区にいて元町の皆

さんと話をしていると、何とか市内各地とパイプがつながればという話が出るのですが、横浜の中でも、例えば元町に来る人の区は限られるわけです。緑区のお客様は渋谷に出て行きますから、新しく来た人たちが横浜の中で何かをなさるには、まず交通機関が整備されていなければ何も出来ない。交通機関が整備されて、それから情報になり、いろいろなものが横浜で動いていくのではないのでしょうか。山手線みたいな状態です。どこか情報や人の動きも一方通行になって、逆に東京からの方が早かったりということがあります。

東京と横浜——横浜にいる存在感

中西 横浜が東京依存であり、特に男の仕事ではその傾向が強い。樋口さんがなさってきた田園都市線もある意味では東京への一本道の確保だったと思います。それがこの二十年の中でかなり変わってきたことですが、東京との接続を考える一方で都市横浜を考えると、横浜の一体性をどう考えてこられたのでしょうか。

樋口 電車といえばどうしても東京へ向かって走ってはおりますが、まちとしては、一つのまちと一つのまちをつなげるだけでは発展は考え

られません。田園都市は横浜、特に港北ニュータウンと接続しておりますし、そんな関係でこれから横浜市の中心部に向けて交通の便も改良されて、つながりは出てくると思います。

これは私の個人的なことですが、私は子供のころは東京に住んで、育ったわけです。そのときは東京に住んでいることを確認する意味で東京タワーへ上ったり、上野動物園へ行ったりしているわけです。今は横浜に住んでいるのですが、横浜に住んでいるのを確認するために大塚橋へ行ったり、港の見える丘公園を散歩しているわけです。東京にいと東京タワー、皇居、上野動物園、銀座通りに行き、横浜へ来るとどうしても海の見える場所へ行ってしまうて、山の方へはあまり行かない。

そんなことで、あえて横浜文化と断らなくても、自分の家の周りは横浜市でなくていいわけです。東京も埼玉も近所は同じで、その中で私は海の見える場所が近くにある横浜に住んでいます。横浜には文化がそばにあるという安心感みたいなものがあって、家からすぐ大塚橋へ行ける、そんな横浜に住んでいるという気持ちがあります。ですから、田園都市にお住まいの方も、今のところ交通が不便で市の中心部まで来る方は少ない、交通からいけば東京の方が便利なのに向こうへ行ってしまう。ただ、住んでいると

「横浜市」と住所を書くので、暇なときは港へ行ってみたいなという意識は出てくるのだと思います。

中西 横浜という自動車ナンバーに若者の人気があると思います。外から見られた横浜にはある一つのイメージがあると思うのです。東京周辺の千葉、埼玉を外から見たとときと違う都市のイメージがありますね。

四——市民が求めているもの

中西 それからもう一つ、先ほどの東急の調査では、このまま横浜に住みたいと考えている人が多い。かなりの方が今のところに一生いると思っている。ということは、定住性が強いのではないかと思うのです。そうすると、横浜という都市はこれから熟成していく可能性が高く、人口流入も今まではには伸びないと思われる。そんな中で自然とか緑とか水が今後課題になってくると思います。いろいろな側面を見て、現状の自分の周りをごらんになっていて、あえて横浜生活の不満、不便を挙げるとどういふことがあるでしょうか。

横浜は大きすぎる——小さい単位で物を見る

大庭 横浜はとらえどころがないというか、大

きすぎると思うのです。地域に密着していろんなことをやればやるほど、区役所に行っても対象が広すぎて何の用も足りない。要するに大きすぎるのです。

横浜市には十六区もあり、旭区といっても七万世帯、二十何万人いる。これだけで地方へ行けば一つの市になるわけですが、それでも旭区というとなんとか見えるなどという感じがする。ところが、横浜市の三百万人というと、関内駅前の市庁舎を仰いでも何にも見えない、すごく遠い。何となくイメージとしての横浜だけれども、自分たちがまちをつくっていくことが遠い感じがして、区単位ぐらいに分けていけるといと思うのです。

その典型で感じているのはごみの問題で、『調査季報九六特集・都市とごみ』の中でも、ごみを処分するのも公害を出すのも行政、チェックをするのも行政、両方が一緒だとできないとおっしゃっているのですね。例えば収集してから処理までは区が責任持つてやり、それを監視するのは横浜市がするといふふうに分けるとできるのかなと思うのですが、もつと区に裁量権をもたせた方が良いのではないのでしょうか。大きいのがゆえの不便さがあるところにあるような気がする。自分たちのまちを住み心地よくしていきたいときには、小単位の方が肌

で実感できるだろうなと思うのです。

交通問題が重要

中西 金指さんは生活の不満や不便な点はいかですか。

金指 交通が一番問題ですね。官庁街にはバスでないと行けないとか、ウォーターフロントといわれているところにあと十年のうちに東急さんが鉄道を通してくださると新聞に出ていますが、期待しているのですが、地下鉄とかいろいろなものが多いからこそ必要じゃないかと思うのです。東京だと地下鉄に乗っていけば、上野に行つて、銀座に行つて、渋谷に行くのもあつという間ですが、横浜にいくと、緑山スタジオに行こうとするとすごく時間がかかってしまふ。交通の不便をすごく感じます。

中西 今の鉄道の話は、港の方へ東横線が延長されるということですね。

港北 ニュータウンを地下鉄が通るのは何年後ぐらいですか。

樋口 今の予定では六十七年と聞いております。

児玉 今、新横浜から先は工事をしていってほしい。将来はどこまで延びるのですか。

樋口 田園都市線あざみ野駅までです。

中西 交通網は最大の問題かもしれないけれど

も、たまプラーザと港はつながるものではないか。

樋口 市の中心部、港というものと、市の北部の丘陵地帯は、イメージとしては別だと思いませんか。

五——横浜の開放性

中西 私たちが行った調査で、横浜に来るとどこに来るかという質問があつたのですが、答は中華街というのが多いのです。横浜の特徴の一つは、中華街に象徴される外国人の人がつくつた文化のエリアがあることだと思つています。日本がこれだけ発展して、今、アジア人労働者という形で問題になってきていますが、横浜の持っている海外開放性からいけば、アジアの人たちが積極的に入つていいまちの歴史を持っていると思うのですが、現実にはなかなか難しい。国際は今は閉じられて、入りづらい条件があると思うのですが、もともとあるハイカラ性、外ものを取り入れる性格、この点はいかがでしょうか。

今までの話は都市の中のソフトの問題だと思つています。それをもう一つ広い環境で見ると、外にどういふふうにかが問題になつてくる。横浜の開放性は都市の性格の一つにな

り、同時に、それが横浜のいい意味でのリベラルな気質をつくつてきたと思うのですが、そういう点、台北での生活と比べていかがですか。

児玉 横浜というイメージの中には港があり、そこが近代文明の窓口だった。そこからいろいろなものが入つてきて、鉄道が明治初めに現在の桜木町駅まで来たとか、水道がきちんとやれたのは日本で初めてとか、鉄でつくつた橋は初めてとか、そういったものが過去にあるのです。私の弟がカナダにずっと住んでいるのですが、たまたま昨年帰つてきたのです。子供は学校の関係で日本語が十分しゃべれないけれども、一番下の子は高校生ですが、夏休みを利用して日本に来たときに一人歩きさせたのです。弟が来て横浜を案内するとき、横浜駅から「そこ」の中を通つて、あそこから水上バスで山下公園に行つて氷川丸を見せたら、弟は非常に喜びまして、丹念に中を見ていました。中華街で食事して、外人墓地に行つたのですが、非常に丁寧に見ていました。

ハードがどんどん発展していき、これから新しい時代を迎えようとしている二十一世紀に向けた横浜を考えたとき、その入れ物の中で、若い人がそこを窓口にして世界と結び合つてほしい。

私が台湾に行つて、初めは様子がわからない

から向こうの人について、勉強のために観光ルートを回るので。日本人の観光団体とぶつかり、見ていて不愉快な思いをしたこともありますが、自分たちがそこで仕事をするといいことになる、ホテルに泊まっているわけにいかないから、現地の人が入っているわけです。ホテルで朝食を食べるのをやめて、まちへ出て豆乳で中国人的な食事をしてみたい、中国の人たちと仕事のコミュニケーションをとっていくことになる、だんだん裏側が見えてくるわけです。

そういう中で、日本人は外に対して、外国人も自分と同じ考え方だと思いがいけないのではないか。相手の立場を考えるとという意味で、若い人たちに大いに海外で活躍してもらいたいのですが、その場合、我々がやってきたような日本のものを外に押しつけるのではなくて、そこで文化が交流して溶け合うということを考えてほしい。横浜というところがそういうことを考えていける、交流出来る場になってほしい。そういう形で横浜がもう一遍見直されてほしいと思うのです。

もう一つは国際化という問題で、日本と国交のある百何十カ国の大使館が東京の港区に集中しているのですが、地価が非常に高くなっているという話を聞いて、そういうものが

横浜に来てもらえないかと思う。そのことが国際化につながって、それが刺激になって、外国人が住みやすい横浜をイメージしていくとか、そんなことを考えてみたりするのです。一極集中ではなくて、横浜が手伝える部分は国際化ということなら、まず外務省あたりをこっちへ持ってこれたらどうかと考えているのです。

国際感覚はあるが、文化の違いで食い違いも

中西 金指さん、ファッションの面で横浜の若い人の保守性についてご指摘がありました。港周辺でお生まれになり、育ってこられて、今の若い人たちの持つ国際感覚をどういうふうにお感じになっておられますか。

金指 たまたま私は、周りにアメリカンスクールがいっぱいある山手の学校に小学校から高校まで行きましたので、半分日本語、半分英語、まともに日本語を書けないけれども、英語でペラペラとやる人が周りにいましたので、外国人を変な目で見ることは少なかった。あそこは中華学校もあるので、顔は同じでも言葉は違うところがあって、あまり違和感を感じなかったのです。学校の英語はそんなにできなくても、海外にはものすごくの子も興味がありましたし、学校で外国人から教えていただいたこともありましたので、私の行った学校は国際人を養成す

る土壌はあったと思います。

私自身、国際結婚するなんて全然思っていなかったのですが、結果はそうになって、主人と話をしているギャップを感じたりすることがたまにあります。先ほど押しつけてはいけないということでしたが、アメリカに行っても日本人は押しつけ的な部分が多く、どこの国に行っても日本流でやってしまうところがあります。そうすると、どこかで摩擦が起きて、日本に対して誤解を抱いている外国人の方が多くいらつしやると思います。お互いに理解し合うことが国際化には大切だと思います。

外人墓地一つにしても、日本人は写真をパチパチ撮っているのですが、主人は「墓地でそんなことをしてはおかしい」と言うのです。私たちは不思議とも思ったことがなかったのに、「多摩墓地に行つて写真撮ったりする？」といわれてみれば、日本人の墓地に行つたらしないけれども、外人墓地は違う。外国人のお化けは何となくこわくないけれども、日本の幽霊はこわい（笑）。それも文化の違いだと思うのですが、おもしろいところで食い違いがあるのです。

文化も違うし、言葉も違う。これからは国際化だと一生懸命いっても、私の友達も留学したのですが、行くと外国かぶれて帰ってきて、日

本の良いところも忘れて批判ばかりしている変な国際人ができたりしますね。また反対に外国はこりごりで、日本が一番いいとか、人によって違うのですが、私は外に出てみると日本は一番いい国だと思いますね。治安が最高にいいことと貧富の差がないこと、生活レベルが比較的高い国は、世界のどこを見てもないのではないのでしょうか。中にいるとそれを自覚しないところが問題かもしれませんね。

中西 横浜の生活のスタンダードは、大ざっぱに言って、中間層の生活とっていいと思います。緑区のように、横浜の中で新しくできたところは、中間層の人々が集まって新しいコミュニティづくりをしてきたと思うのですが、外国の人とか外国の文化はそういう中に入りつつありますか。

横浜人はあっけらかんとしている

大庭 あまり実感としてはないですね。金指さんの話を聞いていても、緑区とか港南区など、開発されたところとイメージ的に違う話を聞いているような気がします。日常生活の中では、私は旭区に住んでいます、中間層が多いということ、外国に行ったり来たりはかなりあります。子供たちも、この大学には滑ったけれども、英語を習ってアメリカに行くとか、簡単

にいえる層になっていますね。ただ、私たちの年代は、もう少し違うのですが、横浜に限らず神奈川県はあっけらかんとしてやってしまうところがありますね。しがらみがなくて、開発されたところに寄り集まっていて、これからつくろうという感じだからこだわりがないのかなと思うのです。

中西 都市を建設される立場から、樋口さん、国際化は今後意識される場所があるのではないかと思います、どうでしょうか。

樋口 これからの課題として考えようということと取り上げていますが、現実問題としては、地価とかいろんな関係で、外国系の企業が東京から離れてき始めていますので、そういう意味では徐々にそういう機運になっていると思います。ただ、現実にはそれを迎えられるようにするのはこれからの課題になります。

六——今後の市民生活

中西 今までの体験を踏まえて、今後を大胆に予測していただいて、横浜の生活はどうなっていくでしょうか。いい側面をとらえればいい未来像が描けないわけでもないし、グルーミーに描けば、一体性がなくなればばらばらで、「隣は何をする人ぞ」という感じになってしまう可能性

もあると思うんです。

街づくりは十年ごとに見直し

中西 樋口さんは、都市計画をしてきて、こゝなはずではなかったと思われれることはなかったですか。

樋口 考え方の問題ですけれども、田園都市というの、この十年はこういう計画でという考え方でとらえています。最後はこういうまちになるといのはだれにも見えないから、十年ごとに見直しをしていこうという進め方をしています。ですから、最終目標がどういうことになるかはだれにもわからない。まちは、大きく変りながら、時代によったり時間によったり社会情勢によったりしてかなり変わってきていますので、そんな意味で十年サイクルでの見直しをしながら街づくりをしています。

中西 過去二十年、十年サイクルが二回来たわけですが、十年、十年での見直しはどういうところがありましたか。

樋口 新しくつくったまちですから、最初の十年はこれから開発をしていこう、人口定着を促進しなければまちはできない。それに必要なものは何か、学校、商業施設。それはどういうふうに配置していったらいいか、それを探っていたのが四十年の初めです。

五十年の初めになりますと、施設も部分的にできてきた、人口もそれなりに定着してきた。

今度は施設の数より、豊かさを求めるみたいな感じで、教育施設の誘致とかバス路線の整備など、質的なものの検討に入りました。

また十年たって六十年になりました、今見直しをしている最中ですが、まちとしてはほとんどできていくということで、質の面での見直しと、計画的には、多摩田園都市全体をもう一回見直して、まちがこれでもいいのかどうか、考えようということで、今計画しております。

地域の問題は「生活館」で

中西 大庭さんの周辺は生活者としての方が多と思うのですが、生活者からごらんになって、横浜の現状と今後をどんなふうに予測されますか。

大庭 予測はできないし、わからないのですが、自分たちがこうありたいとか、こうしたいと描いているものはあります。ベースに考えているのは、競争社会は終わりで、いろんなところで共同していくことだろうということだと思います。そのための地域の機能の一つとして「生活館」をあちこちにつくろうということ。生活者の夢として、向こう三年の計画、五年の計画は私たちの周りをつくっているのです。私

だったら旭区とか近い瀬谷区を含めた地域について、緑区については、緑区の人たちがつくっています。

横浜市とか東急さんと一緒にやればよいのでしょうか、すぐには無理でしょうから、私たちで出来るところから始めたいと思います。市民も自分たちの夢を自分達なりに描いていて、各区で向こう三年どうするかという話を年中やっています。

イメージとすると、地域の「生活館」の中にいろんなものを盛り込む、そうすると自分たちが高齢化していく上にもプラスになるのですが、それにしても横浜全体ではだめで、旭区とか緑区とか見える範囲でないとだめですね。これくらいの地域にすればわかるのです。あそこに行ったらああいいう病院があるとか、ここにいったら何があるとか、イメージできます。予測ではなくて、こういうふうにしていききたいねということは、私たちの周りではかなり意欲的にやっています。

中西 向こう三年の計画を、共通項でとらえる「生活館」の充実ということでしょうか。

大庭 今は主婦も地域にいらなくなってお年寄りと子供だけしかいないのです。元気なお母さんも外に働きに出ているから、もっと自分の地域の中に呼び戻したい。今のところ仕事といって

も、今までシャドーワークといわれていた部分でしかできていません。シャドーワークとしてはなく、ちゃんと資格を持った人とか定年でリタイアした男性が地域で何かできないのか、それらも含めて生活館の有効性を発揮し充実させたいと考えています。

年寄りもつながりを持って

中西 今後お年寄り、特に男性の社会の中における自己実現が大きい課題になろうかと思うのです。大庭さんのお話にも出てるように、女性はかなりアクティブですが、今後をどういうふうに予測されますか。

児玉 会合で、ある人が、「高齢化していくのに女性は強い、やることは幾らでもある」とおっしゃったのですが、女性は地域とのつながりとか子育てとか、そういう大事なことで過ごしてきています。男性の方は、サラリーマンという層をとれば、企業との結びつきはあるけれども、一たんそれが切れたとき寂しいものが残るのですね。

T・B・T協合理事長が一番叫んでいる問題は、そういった時代になったとき、高齢者が自分は引退したから、あとは自分のやりたいことをやるという考え方はいけない、高齢者自身が年金をもらって生活していくにしても、これ

からは若い人たちに非常に負担がかかる、それを自分たちで少しでも軽減するように努力しよう、生きがいを見つけていこう。そうするには個々ばらばらではだめで、我々として、まだささやかですが、自分たちで会合を持ちながら何とかやっていこうということなのです。

もう少しそういう場を広げるためには、体の不自由になった人をケアするための施設も必要ですが、健康な人たちが集まれる場が重要だと思います。健康を持続するために、今はやってきているスポーツクラブも我々の現役時代はなかったのですが、今は非常に盛んになっている。これがこれから大きな産業になるのではないかといわれて、方々にできていますが、こうしたクラブは若い人向きにできていて、我々としては暇はあるけれども、そういうところはなかなか出入りにくい。そこでもうちょっと考えて、年輩の人でも気軽に入れるクラブがあったほうがいい。そこには大きな風呂があつて、温泉的な気分も味わいながら碁をやったり、仲間と話したり、ミーティングもできる、そういうものが地域にあつたらいいのではないか。そういうことに対しての横浜はもっと積極的に対応してほしい。

それから、これからはゆとりを持つことが大切だと思います。例えば、まちを歩いて一番目

についたのは、桜木町駅のところ。信号があり、車で行って赤信号でとまったときに気がつくのですが、横断歩道を渡るのに、青の間に道を二つ渡ろうとするらしくて、駆け足で渡るのですが、ゆとりのある街並みの横浜としては、ああいう風景はこれから少なくなってもらいたい。外国の人と外に出て、信号が間もなく変わろうとしたとき渡ろうとしたら「待て待て」と言われました。

他にも、例えば、エレベーターに乗って、すぐに自分の行く階を押して、ドアが閉まらないとすぐクローズのボタンを押すのは日本人、外国へ行ってそんなことはまず考えられないということ、これからはゆとりを持っていくようにしたい。

リタイア後のコミュニケーションの大事さ

児玉 健康を維持するために、高齢者向けの軽なクラブ的なもの、病院などを整備していくのとは別な面で、健康な人たちがそれを継続できることにお金を投ずるのは、医療費の節約になるのではないか。病院が完備されて、医学が進歩して長生きできるようになったのはいいけれども、私も時々病院に行ったりしますが、流れ作業で、患者の受付はコンピューターでやるから非常によくできているんですが、お医者さ

んとコミュニケーションがあまりよくできていない。「終わりました」ということで薬をもらうが、その薬がどう効くかを聞けば飲みかという気になるけれども、人間はわがままでから、ちよつと調子よくなつたら薬なぞ飲まない。健康保険でたくさんのお金を使いながら、薬の半分は使わないうちにほつたらかしてしまふ。薬の効能をお医者さんが説明する時間もないのではないか、そういう面の配慮をしてほしいと感じます。

中西 僕は仕事柄、割合あちこち歩くのですが、この間、全国を一世風靡したのはゲートボールでしたね。今のお話にあつた高齢者向けの軽なクラブといったものは、女性だとそれに対して自己実現していくでしょう。男性はなぜできないのですか。

児玉 私の場合、それが下手だと思つたのです。知らない人に会つてもすぐ話ができる人とそうでない人がいるし、女性でも、積極的に人の相談に乗る人もいます。手芸が好きで、こつこつくるのが趣味だという人もいますから、個人個人の性格だと思つたのです。

私の住んでいるところも東急さんが開発したところで、三ツ沢グラウンドの裏側で、住宅金融公庫の平屋建ての家がずつと建っています。年がたち、皆さんが建てかえた状態で、住んで

いる人の七割ぐらゐは変わらずに昔のまま。その人たちは高齢化しているわけです。私は後からそこに入り二代目ですが、三十何世帯の一つのブロックは、「粗大ごみはいつです」とか、「赤い羽根の募金があります」という回覧だけで、コミュニケーションは全然ないのです。隣は何をする人ぞでもって、会えばあいさつはするけれども、それ以上にはならないのです。

中西 リタイアした後の「社会実現」はこの都市でも共通していて、男の場合は特に蓄積が必要だと思えますね。

ライフスタイルの変化が進む

中西 金指さん、仕事の立場で差異化、個別化というお話をされましたが、そういう点を含めて今後どう考えられますか。

金指 先を見るのは難しいんですが、今は極端で、物を売る立場からいうと、売れるものは安いものか超高級のもので、中間はなかなか売りにくい。二極分化があるし、若い世代は遊ぶことが必須の科目になっていますから、何でも遊ぶ感覚がないと物事は進まないのです。朝起きて、仕事をしないで遊んでいる平山人とある種似たようなところがあって、朝起きて今日は何をしようかとか、遊ぶことに関してはアンテナが広く、演出とかパーティーはうまい。そうい

う人たちが社会の中を占めていくわけですから、そういう人たちが高齢化したときとか、先を見ていろいろなことを考えているのです。

私は仕事上、眼鏡もあつかっていますが、眼鏡は高齢化社会に絶対欠かせないもので、それを見ていくと、いいものとか高いものでも自分に似合うものを持ちたいとか、見ればいいという実用性だけでなく、ファッション性を求めるおしゃれなおじいちゃん、おばあちゃんが増えてきています。

先を見てどうのこうのとはいえないのですが、これで大丈夫なのかという不安なところもあります。私もまだ二十代で、年をとっているとはいえない方ですが、十代の子たちを見てみると、あれで大丈夫かなと心配になる。十代でも女性の方がしっかりしていて、しっかりしている男の子がいないのです。

友達でもまだ独身の人がいて、女性の自立が先立ってか、「私、給料これだけでもらっているから、男の人ならこれぐらいなくちゃ」という感じで考えている。今までのライフスタイルがこれから壊れていくのではないか。一人で一生終わる方もいらつしやるでしょうし、一人用の電化製品がものすごくはやっていますし、そういう意味のシングル族と、団塊の世代の人たちが高齢化したときにどういうサービスがあ

えていくか、興味深いところでもあります。

中年男性の生き方

中西 児玉さんが活躍なさっていたときより、今は個人にとって会社の役割が少し小さくなったかもしれないと思うのですが、それでいて相変わらず仕事の比重は大きい。そして一方では国策も含めてゆとりということがいわれてきて、そのはざまに中年男性がおります……。

樋口 一時猛烈社員といわれた時代があって、会社には忠誠を誓って仕事一辺倒でなくてはいけないと思っていたのですが、最近になりまして、仕事第一はいけない、自分の生活が大事だという風潮になってきたわけですが、その辺の切りかえが急にはうまくいかないわけです。仕事は一生懸命したいですし、遊んでもいい、確かに中途半端で、割り切れないところがあります。

中西 児玉さんからは自分の住んでいるところの赤ちようちゃんというお話がありました。樋口さんの場合、上大岡周辺でそういう場はできておりますか。

樋口 自分の家の近所、最寄り駅の周辺、横浜というまち全体というふうに分けてみまして、自分の家の周辺は団地のようなところですから、状態としては市内の大部分の住宅地とほと

んどかわりません。駅の周辺だけ、地下鉄が通ったりスーパ―ができたりにして非常に変わってきています。自分の家の近所は「ふるさと」と感じますが、現在の駅周辺はまだ「まち」としての魅力が少し足りないと思いますので、何かのときは横浜市の中心部へ出るということになります。今、駅周辺の活性化に努めておられるようですから、これからは変わってくると思います。まち全体としてみると、「横浜市」と住所を書くとき、横浜というものを見たい、そうすると港へ出たり、市役所の広報を見て、こんなところがあると書いてあれば、そこを訪ねて行ったり、そんな生活です。

情報発信できるまちに、市民に

中西 私の仕事は取材とか編集で、事務所は東京の表参道にあります。仕事の軸を横浜へ移せないかと思う一瞬もあるのですが、正直いって、私の家業で横浜で食べられるとは思えないのです。東京にこだわるわけではないけれど、横浜で我々の仕事で食べられるような環境が出来ていない。横浜にも新聞とかテレビとかFMなどいろいろできているし、情報も東京発信のものだけでなく、横浜独自の情報発信形成ができてあるのかもしれないのですが、現状では取っかかりがない。「共同デスクYOKOHAMA」を始めたのは、東京の情報で動くのではなく、横浜に限らずいろいろなところの情報が発信で

きるようにしてみたいと思ったからなのです。現実にはミニコミレベルではいろいろなところでできているし、そういう動きが横浜の中でも世代とか地域によってあるわけで、そういうものが今後横浜の一つの性格をつくっていくのではないかと思っています。横浜の場合、そもそもハイカラとか発信性でできたまちで、そういうものを持っている伝統というか、性格をなくしたら都市の性格が変わると思うのです。

今日は、もともとのテーマが大きすぎるので、ある意味の取っかかりでしかなかったかもしれないと思うのですが、それなりに現在の横浜の生活の一端を出すことができましたと思います。